

子どもを 売らないで!

日本ユニセフ協会大使のアグネス・チャンさんが、8月19日～24日まで、カンボジアを訪れました。アグネスさんは、国境をこえて行きかう子どもたちのようすを見たり、人身売買の犠牲になった子どもたちが暮らす施設を訪問したりしました。

また、アグネスさんと一しょに来日した2人のカンボジアの子ども・若者活動家が、「ユニセフ子どもセミナー2002」を開きました。

Report from CAMBODIA アグネス・チャンさんからの報告



最初に向かったのは、カンボジアとタイの国境にあるポイベット村でした。カンボジアを訪れるのはこれで3回目です。最初は1988年、ちょうどベトナム軍がカンボジアから撤退した後の年でした。1988年、人びとは無表情で絶望の中にいるようでした。多くの人が虐殺されたポル・ポト政権時代の悪夢から立ち直れていないようでした。

今回、訪れたポイベット村では、物が増え、人びとの表情は明るくなっていました。でも、すっかり平和がもどったというわけではありません。たくさんの方が貧困で苦しんでいます。

カンボジアとタイとの間にある浅い川。その川を渡るとポイベット村に入ります。子どもたちが、「お金をください」とよってきます。多くの人がタイへ向かって国境をこえようとしていました。

彼らは、朝、国境を渡り、夕方、帰ってきます。国境を渡るときは、緑色の許可証が必要です。これは10パーツ（およそ30円）で買うことができます。子どもにその紙はいりません。だから子どもがさらわれても、よくわかりません。子どもの手をとって、「自分の子です」と言えば国境を渡れてしまうのです。

カンボジアで一番多いのは子どもです。その子どもが売られます。安い労働力としてねられます。言いなりになりやすいから、純粋だから、一生けんめい働くから、親孝行だから...、子どもたちはそんな理由でひどい目にあっているのです。



日本ユニセフ協会大使
アグネス・チャンさん
カンボジアを訪問

人身売買の
防止にとりくむ
カンボジアの
子ども・若者も
来日



背中に荷物をかかして国境を越える子どもたち

Report 1 傘さしをする ワニーちゃん

ポイベット村で、ワニーちゃんという女の子に出会いました。ワニーちゃんは13歳で、身長は140cmほど。日本の13歳の子とくらべて小さいと思います。ポイベットには大きなカジノが建設されています。タイではカジノは禁止されているので、タイ人や外国人がこのカジノへやってきます。そのお客さんを自当てに、子どもたちが、カジノのまわりで仕事をしています。ワニーちゃんの仕事は「傘さし」です。カジノから出てくる人に雨や日差しをよける傘をさしかけて、運がよければ5パーツほどもらいます。1日におよそ90円をかせくそうです。

ワニーちゃんの家によせてもらうことにしました。バイクが引っぱるリヤカーに乗って移動します。なんにもない所にボツボツとあるうちのひとつ、今にもく



ワニーちゃんの家へ向かう

ずれそう小さな家でした。そこにワニーちゃん、両親、兄弟、妹と暮らしています。電灯もついていません。お母さんは、妹の世話にばかりきり、ワニーちゃんが2人の弟を食べさせます。朝6時に起きて12時間働いて、食事はご飯になすの煮物だけ。かせいたお金は家族にわたします。お父さんは帰ってきていないし、お兄ちゃんはタイに行っただけです。それでも、家族があって帰る家がある。ワニーちゃんはまだよいほうだったと後から分かってきました。



Report 3 私たちはカンボジア第2の都市バタンバン 母親に売られた サリーちゃん

私たちはカンボジア第2の都市バタンバンに向かい、人身売買の犠牲になった子どもたちが保護されている施設「ホームランド」を訪れました。そこで、サリーちゃんという女の子と、アドリーくんという男の子に出会いました。サリーちゃんはお母さんに売られ、タイに行きました。花やキャンディ売りさせられていたそうです。アドリーくんは両親をなくし、あずけられたおじさんの子どもたちと一しょにタイに働きに行き、警察につかまり、送りかえされました。

サリーちゃんは次の日、家に帰ることになっていて、私はついていくことにしました。でも、サリーちゃんは途中で具合が悪くなり、車の中で何度も吐きました。とうとう、施設の先生が「今日はあきらめよう」と言いました。

私はひとりだけでサリーちゃんのお母さんを訪ねました。ほんの少しの菓物売り、たおれそうな家に2人の子どもと住んでいました。2人のお兄さんは親せきにあずけたと言います。おどろいたことに、サリーちゃんは2回売られていました。1度家にもどってきたのに、また知り合いの女の人からお金を受け取ってあずけてしまったというのです。サリーちゃんの具合が悪くなった理由がわかりました。お母さんに会いたいという気持ちは大きいのに、帰ったらまた売られてしまうかもしれないと心配だったのでした。

子どもを売ってしまうお母さん、ものすごくつらいと思います。私はサリーがどんな目にあっただか、今きつとどんな気持ちか、話しました。「子どもが売られてどんな目にあうかわからなかった。でも分かったから、もう2度と売ることはない」とお母さんは言いました。サリーちゃんを売ったのば下の子が病気になるからさうです。では「また下の子が病気になるらどうするの?」と聞いてみました。

お母さんは泣きながら「サリーが自分で行くと言ったんだよ」と言いました。私は、それでも、「絶対に売ってはいけない」と話しました。



サリーちゃんのお母さんと話す

でも私の会った子は、帰ってこられた子たちでした。子どもが行ったきり帰ってこない、どこへ行ってしまったか分からない、という話もよく聞きました。今日もたくさんのお母さんが家に帰らず、夢も希望も、場合によっては命さえもうばわれていきます。お金のあふる人が何でも買える、子どもの命も、夢も希望も好きなようにできるなんて、ゆるせないことです。私たちもがんばって、必死に生きている子どもたちを応援していきたいと思えます。

Report 2 「グットー」という団体を訪ね だまされて連れ去られた ウェットちゃん

そこでウェットちゃんに出会いました。彼女は人身売買の犠牲になった子どもでした。

ある日、ウェットちゃんは、村の子どもたちと一しょに、村ではめずらしいビデオを見ていたそうです。普通の家にテレビなどないので、子どもたちが集まってきました。そこでウェットちゃんは、男の人から飲み物をわたされ、それを飲んだら気が失ってしまいました。目がさめるとき、ウェットちゃんはタイにいました。バンコクでほかの子どもたちと、花売りやキャンディ売りをさせられました。売上げが300パーツ（およそ900円）になるまでキャンディを売らなくてはならず、売れなかつたらご飯はもらえません。600パーツ以上売れるとわずかなおこづかいももらえたそうです。私はウェットちゃんに聞きました。「いままで見たい一番悪い夢は何?」彼女は「電線のむちで打たれること」と答えました。それは夢ではなく現実でした。300パーツ売れないうちで、むちで全身を打たれたそうです。「楽しい夢は?」と聞きました。彼女は、「一度も見たことがない」と答えました。彼女は今16歳くらい、両親はなくなっており、お母さんはエイズだったそうです。

私たちは半日の学校を開いている施設にも行きました。なぜ半日かというと、働いている子どもたちが丸一日学校に行くことはできないからです。しかも給食つきという条件で親を説得し、子どもを通わせています。ここには人身売買の経験を持つ子どもがたくさんいました。男の子は物売りとしてだけでなく、農場の労働力になります。年ごろの女の子は売春をさせられたりします。もどってくるときは、タイで不法滞在者として警察につかまって強制的に送りかえされてくるのです。



ウェットちゃん



学校に給食があると通える子どもたちがいる

ユニセフ子どもセミナー2002

アグネスさんの報告に続いて開かれた「ユニセフ子どもセミナー2002」では、はじめに、以前からこの問題について積極的に活動している国会議員の谷垣禎一さんがスペシャルゲストとして、8月にミャンマーとカンボジアを視察されたお話をされました。谷垣さんは、ごみ山で暮らしたり、国境をこえて人身売買されたりする子どもたちのようすを報告し、現地では警察官などの給料が少なく、わいの受け取りが起りやすいなど、子ども搾取や虐待の取りしめがすまない理由を説明してくださいました。



続いてカンボジアの2人がワークショップをはじめました。小柄な体からは想像のつかない大きなエネルギーに、参加者もどんどん引き込まれていったようです。



ソクンティアさん(左):カンボジアのNGO「子どもの権利財団」の創立メンバー。21歳。子どもの人身売買を防ぐために子どもによる監視システムを計画中。昨年12月に横浜で開かれた「第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」や今年5月の「国連子ども特別総会」に参加した。

ソーバナレツさん(右):子どもの権利を広める青少年団体の活動に参加する活動家。17歳。貧しい家庭の出身で、13歳で学校をやめ、お母さんと市場で野菜を売る生活。毎朝4時に起きて野菜を仕入れ、お昼まで野菜を売る。一日の売上はカンボジアのお金で3000~4000リエル(およそ100~150円)。午後、縫製学校に通っている。

VIDEO

ビデオ

最初に「The Victim (被害者)」というビデオを見ました。これは、実際にあった話をもとにユニセフがNGOと協力して作った現地で使われている啓発用のビデオです。

2人の警察官が行方不明になった少女スベイブルーの捜索をはじめます。捜索をすすめる中で、スベイブルーはあるカラオケバー(買春宿)で働かされていることがわかった。彼女はお手伝いとして働けると言われたのに、実際は、無理やり薬を飲まされ、カラオケバーに売られたのだった。翌日、救出に出た警察官が彼女を見つけたときには、彼女は自殺していた。

ビデオを見て...

Q日本でも似たようなことがありますか?
 A女性か帰りにレイプされたり、女子高生が自らの性をお金などひきかえに売ったりすることはあります
 Qスベイブルーはなぜ自殺してしまったのでしょうか?
 A昔の自分にもどれないと感じたから? はずかしくて家族に自分の姿を見せたくないと思ったのかも。

DISCUSSION

話し合い

年齢別に3つのグループに分かれて、話し合いが行われました。各グループからは、「人身売買」は、「人を人として考えないこと」、「人をモノとして売ること」、「人の命をもて遊ぶこと」、「子どもの性的搾取」については、「子どもの体をおとなの思い通りにすること」などの意見が出ました。そして、「私たちにできること」については、次のような意見が出ました。

- ・おとなだけでなく子どもにも買春問題について情報を出す
- ・教育(性教育)を充実させる
- ・貧しさから抜け出せるように人ひとがもっと働ける場をつくる支援をする
- ・相手の立場を考えられるように、思いやりを持てるおとなになるように教える
- ・学校の友達にこの問題を伝える
- ・政府に立法を働きかけたり、おとなに考えを伝えたりする



VOICES

アンケートから

今日見たことや、聞いたことを忘れずに活動をひろげていきたい。自分の友達やほかの人にも今日のことを伝えていきたい。私達と同じ年の子どもたちが性的搾取を受けていることにショックを受けました。日本という豊かな国が、このことにもっと関心を持つべきだと思います。おとなの理解と教育がとても重要だと感じました。

子どものパワーはすごい! みんなで子どもの商業的性的搾取をなくすために動けたらって思う。
 人身売買の問題はすごく大きくてむずかしくて、目をそむけなくなる時があります。そんな時、力になることは、その問題にとりくむ仲間がいるということです。カンボジアの2人に力をもらいました。一緒にがんばろう!



参加した子どもネットワークから

世界の子どもたちがモノとして思われ、またモノとして使われていることが、よくわかりました。なぜ子どもがおとなの道具のように使われないといけないのか、とても不思議に思いました。しかし、話を聞いていくと、そのうちのひとつの理由がお金がないから、というものでした。ぼくは、これを聞いた時にとてもがっかりしました。お金がないだけで子どもを売るのはひどいと思いました。
 ぼく達にできることは、同じあやまちを二度とおこさないようにすることだと、この報告会で思いました。 **丸竹 拓也 12歳**

8月26日午前中はアグネスさんの帰国報告会に参加して、午後は子どもセミナーに参加しました。子どもセミナーはソクンティアさんとソーバナレツさんがとてもわかりやすく説明してくれたので、カンボジアのことがよくわかりました。
 カンボジアが貧しくて、子どもが自分も働かなくちゃと思って、がんばっているのに、子どもが売っているものがなかなか売れなかったりすると、すぐにムチで叩いたりするのは、本当にいけないと思います。花やあめを売るのではなく、買春される子がたくさんいることもわかりました。本当にかわいそうに思いました。仕事がいやで逃げ出そうにも、さらにひどい暴力を受けて逃げ出せない。本当に子どもを物扱いにしていると思いました。貧しいから少しでも働きたいという子どもの気持ちを、おとなの都合のよいことだけに使うのは、許されないことだと思います。もし、家に帰れたとしても、また売られるかもしれない、まわりの人から差別を受けるかもしれない。こうして子ども達は生きていく道をなくしてしまう。こんな環境で生きている子ども達を早く救ってあげたい。 **渡辺 潤 13歳**

カンボジアでは現在多くの子どもが売り買いされているそうです。1970年ごろから20年以上におよぶカンボジアの内戦が始まり、人びとは貧困になやまされました。内戦が終わった後も、貧困は続き、生きるために多くの女性が売春にたずさわるようになりました。国が少しずつ豊かになると、外国から安いお金で女性を買いにくる観光客が増えたそうです。買春されている人の3分の1は18歳未満の子どもです。また、多くの子どもが労働力として海外に売られています。ソクンティアさんの話によるとターゲットは13~14歳の女の子なのだとか...。「海外の工場で働かないか?」などと密売人にだまされて、性産業で働かされるそうです。

また、HIV/エイズが大きな問題となっています。カンボジアの性産業で働いている人の42.6%はHIV(エイズを引き起こすウイルス)に感染しているそうです。カンボジアではまだ、法律や社会福祉制度が不十分で、問題の解決はとてもむずかしいことだそうです。

お話を聞いての感想

人身売買がこんなに世界でひんぱんに起こっているなんて想像もしていませんでした。新聞で、「臓器売買のために子どもが売られた」というニュースを見たことがありますが、本当にまねな問題だと思っていました。それだけでなく性的搾取を目的とした人身売買が起こっているということを知って大きな衝撃を受けました。



小さな子どもならエイズにかかっていないからといって、ターゲットにされるのは信じられないことです。もし、自分が被害を受けていたら本当にいやです。私のいる環境から人身売買が現実起こっていることを受け止めることはむずかしいことです。本当に信じられないし信じたくないです。こういう問題が早く解決されることを祈ることでできません。また、解決のために私にもできることを考えていきたいです。 **小張 真理子 17歳**

写真: ©日本ユニセフ協会/Nozawa